

“太陽黒點に關する通信”の中に、彼は大胆にも、宇宙原理に關する率直な意見を表明する態度を採つたが、之れこそは、彼が大侯の秘書ギンダ Belisario Vinta へ書き送つた手紙にも述べた如く、彼の一生の運命を賭けたものであつた。

かのコペルニクの時代でさへ、其の新宇宙論と聖書の記事との間に或る矛盾があると疑はれ、殊に此の疑ひは、ブルーノ Giordano Bruno の反キリスト教的な推論によつて益々濃厚になつた。しかしながら、此の問題は、ガリレオが勇敢に世間へ發表し、權威者たちに挑戦するまでは、公けには議論されなかつたものであつた。尤も、ガリレオとても、決して始めから神學問題を引き起す意志は無かつたのであるけれど、一旦、議論が始まつて見ると、ガリレオは彼獨特の猛烈な論法を以つて戦つたがために、遂には其の身邊に危険を來すまでに至つたのであつた。

1613年十二月、カステリ Benedetto Castelli と呼ぶペネディクト派の僧で、當時、ピザ大學の數學の教授であつた人が、ガリレオに一書を送つて、大侯の朝廷で、かつてガリレオ自身が招かれてコペルニク論を辯護したことのある論議の近況について書いた。元々カステリはガリレオの親友であり、又、弟子でもあるので、此の手紙は極めて禮儀正しく、又、立派なものであつたと思はれた。ガリレオは、之れに對して、返書を認め、天然理學と聖書との關係についての理論を述べ、更に其の翌1614年、トスカニ大侯后クリ스티ナ (Christina) 殿下への書信にも此の論議を説いた。ガリレオは此等の書信中に於いて、單に聖書の言葉を説明するのみに満足せず、進んで大胆にも聖書の中にコペルニク説の肯定論があることを示さうと努めたが、之れは、少數の學者たちには新論と思はれたけれど、多くの愚者にはむしろ詭辯と思はれた。かうして論争が漸次やかましくなると共に、アリストテレス派の人々を益々刺激興奮せしめ、遂に、アドヴェント祭後の第4日曜には新サンタマリヤ寺の講壇上からの問題となつた。カッチニ教父 (Padre Caccini) が新天文學説を批難したことは、其の先輩たちによつて強く叱責されたけれど、ロリーニ (Lorini) と呼ぶトミニカン派の僧は、1615年二月5日、遂にガリレオからカステリへ送つた手紙を以つて宗教裁判所に訴へるに至つた。(つづく)

天 界 正 誤 表

第249號 昭和17年第3號)

誤

正

第86頁 1行目

ボククス星

ボルクス星

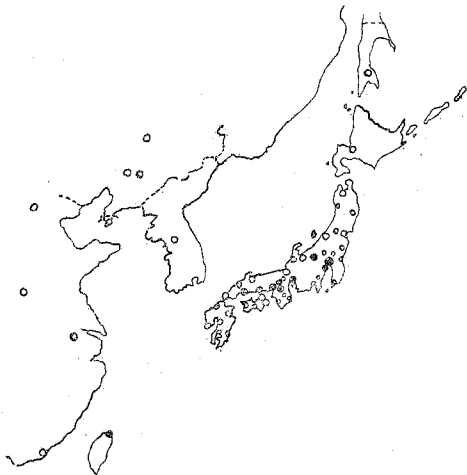
第97頁 下ヨリ9行目

試験のしやう

試験をしよう

事務局だより

★ラングリ 航空母艦撃沈され、星港陥落の報に皇軍の赫々たる戦果を讃ふる時、躍進理學日本の榮譽を双肩に荷つて、新しく悠久の天文學入門志望者の消息が春淺き琵琶湖畔の事務局の窓を日々賑はして居る。會員の分布を眺めて觀測陣の愈々堅實なる守を念じつゝ、簡單乍ら會員分布圖を作つて諸彦への春の報告としよう。



圖の説明： ●印は200名以上，○印は100名以上，●印は50名以上，○印は50名以下である。主として府縣廳所在地に「印」がつけてある。觀測部員は大體會員數の3分の1で、其の比率は會員と殆んど同様である。各地にある皇軍勇士（免會費）並びに米國、布哇、ブラジル、ベル1、南洋群島等にある會員は圖の關係上省略した。（ブラジルは●印、他は凡て○印に屬するものである）

“プロペラの風なまぬるし南十字搖るゝ” （佐登兒）

知新觀象臺販布天文寫眞 本會々員のため、特に自ら貴重な時間を費して、秘藏の天文寫眞の調製に當つて下さいました知新觀象臺（清水眞一氏經營）より從來の天文寫眞は、同氏の多忙と材料の高騰等に依つて、一先づ一般への製作を中止したき旨の報知がありましたから御諒承下さい。尙ほ各最小型のみ（No. 1—26）當事務局に残品少數乍らあり、希望者に御頒ち致します。

清水眞一氏の今日までの特別なる御厚意に對しまして會員諸氏とともに深甚の感謝を捧げます。

天界正誤表

第247號(昭和17年第1號)	誤	正
第33頁 三月の天文カレンダー	三月5日ノ項(脚註)ニ「イ1スタ」トアルハ	四月5日ノ誤リ
〃 〃	三月8日ノ項(脚註)ニ「灌佛會」トアルハ	四月8日ノ誤リ
第249號(昭和17年第3號)		
第93頁 8行目	午後は8時前後に多い 午後は3時前後に多い	

1942年の天文年鑑（本誌第247號特輯）事務局に多少の餘分がありますから、御希望の方は御申込み下さい。價40錢 送料5厘（會員は送料不要）。